



吉本（長野県南佐久郡）は、全国に約6000軒の森林を所有し、県内を代表する林業事業体の一つ。カラ松を主体に、伐つて植える循環林業を推進し、100年先を見据えた山づくりに取り組んでいる。人気の高いカラ松だが、10年前には「未来なし」と言われた時代もあった。手を引く企業が相次ぐなか、同社は業界の精神的支柱となつてカラ松林業を支えてきた。今後に掛ける思いを由井正隆社長に聞いた。

昨年はカラ松の生産場に隣接した林道が使用請負の発注が2〜3かえないため、かなり速月遅れ、各事業所の着回りして搬出してお手が大幅に遅れた。そり、生産数量が停滞しここに台風19号で被害が起きている。こうした影響発生し、東信森林管理から需給バランスが崩菅管内で2カ所は完全れ、値段だけが高くなに止まっている。当社、カラ松が入手できる事業地もあえて生産なくなっている。各事はしているものの、現業所とも土場に在庫が

なく、注文があつてもばならない。好調な荷い。現実には丸太がないのが動きのカラ松だが、ないものはどうしようもユーザーには大変迷ないという事で、代感を感じており、需給替材に転換せざるを得た人はいない。口バランスの崩れを一刻ないような最悪のケーシアの丸太輸出関税をも早く回復させて、希スも考えられないわけ契機に合板工場が国産望する材が手元に届くではなく、あまり良い材に大幅にかじを切り状況にしていかなければ状況とは思っていない

## カラ松は永遠の資源

### 民有林の皆伐・再造林へ



吉本社長  
由井 正隆 氏

する丸太が滞貨するこ  
とがなくなった。伐つた丸太は確実に売れることが我々としても自信になっており、確実にカラ松の時代が来た  
と実感できている。この地区では主力の林産資源であり、林家の考え方も大きく変わってきた。

林家は高く売れた時代を知っていることか  
ら、ここ10年、「立木を売ってください」とり働き掛けてきたが、値段が安いということでなかなか乗ってきてもうでなければ、民間の山がプラスアルファとなり、林家も高齢になり、もうこれ以上待てない、自分の代でつくったものを自分の代でお金にしたいという気持ちが高まっている。今までは国有林、県有林、町村有林といった公有林がカラ松供給の主体だったが、50年が経ち、資源が充実し、民間の山も皆伐業という形で買い取りが可能になってきた。皆伐で買い取るのと、は、おのずと林家に返す金額も違ってくる。

我々も高く買い取れ、林家にも今までのより還元できる形で買い取り活動が進んでいる。だから、公有林関係が今までもおりの出材を続けていただけよりであれば、民間の山がプラスアルファとなり、生産量と販売量の増大につながっていく。そこで一番心配されるのは、伐りっぱなし林業だ。我々にはカラ松に代わる資源はないのであって、やはりカラ松を永遠の資源としてやっていかないと循環林業が成り立たなくなる。林家が木を売りたいと持ち込んでもらうケースが増えているが、当社は皆伐・再造林を必ずセットでお願いしながら仕事していきたい。